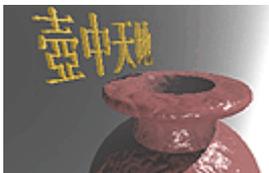


2014/11/12-11:00

【壺中天地】第96回 時事通信社編集委員 高田信二

「ゾルゲ・尾崎処刑70周年」国際シンポジウム



今年11月7日は、戦前に起きたいわゆる「ゾルゲ事件」で、ソ連軍事諜報員リヒアルト・ゾルゲとその盟友で元朝日新聞記者の尾崎秀実が国防保安法違反などによって処刑されてちょうど70年。それを記念して、先日、都内で国際シンポジウムが開催されるというので聴講してきた。

◇ブケリッチの子息も参加



ゾルゲ事件国際シンポジウム(筆者撮影)

主催は日露歴史研究センター(白井久也代表)で、ゾルゲ事件に関する国際シンポジウムは過去にモスクワや上海などでも開催したことがあり、今回はこれで8回目だ。同センターは年に4回、「ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集」を発行しており、恐らく、世界的に見ても、これだけの規模でこれだけ長く続く研究会はまれだろう。

会場には、元アヴァス通信(現AFP通信)東京特派員で、ゾルゲ諜報団の一員だったブランコ・ブケリッチ(1945年、網走刑務所で獄死)の子息ポール・ブケリッチ氏がオーストラリアから、山崎ブケリッチ洋氏もセルビアから来賓として参加し、まさに国際シンポジウムにふさわしい会となった。

講演会には5人のパネリストが登場した。作家で日本ペンクラブ理事の小中陽太郎氏(「ゾルゲ断章ーわたしの執筆ノートより」)、中国・復旦大学教授の蔵志軍氏(「中国におけるゾルゲ関係研究について」)、社会運動資料センター代表 渡部富哉氏(「ゾルゲ事件端緒説をめぐる諸問題」)、ロシア国立軍事公文書館研究員ミハイル・アレクセーエフ氏(「整理が急がれたゾルゲ諜報団『ラムゼイ機関』」)、早稲田大学客員教授加藤哲郎氏(「『戦後ゾルゲ団』『第二のゾルゲ事件』の謀略?」)の5人だ。

◇ゾルゲ事件と731部隊との意外な関係

残念ながら、ここではすべてはご紹介できないので、1人だけ、最後の加藤氏の講

演を紹介したい。私としても衝撃的だったからだ。

話は長くなってしまうので、簡略化して書くことにするが、ゾルゲ事件と戦争中に中国で人体実験をしたとされる石井四郎陸軍軍医中将率いる「731部隊」との意外な関係だ。もちろん、直接の接点は全くないが、加藤氏の説明によると、これまで極秘扱っていたゾルゲ事件は戦後、国際的なスパイ事件だと大々的に喧伝されることになるが、その最初となるのが「政界ジープ」という右派雑誌の48年10月号に載った「尾崎・ゾルゲ 赤色スパイ事件の真相」という記事だったという。

この政界ジープ社の社長が二木秀雄という金沢医大出身の医者で、731部隊(結核班長)に所属していた。戦後、石井四郎をはじめ、関係者はなぜか戦犯にならず、東京裁判でも訴追を免れたが、それは、すべての関係資料をGHQに提供して尋問に答えるなど「司法取引」が成立したためだと言われている。その膨大な関係資料を一時保管した場所が、金沢医大であり、米軍側に資料を提供したのが京大医学部出身で731部隊残党組だった内藤良一(日本ブラッドバンク=後のミドリ十字=を創設して、朝鮮戦争の際に利益を得る)と二木だったという。その元731部隊員と米軍を仲介したのが、有末精三、服部卓四郎といった旧陸軍将校で、彼らは戦後、日本の再軍備に重要な役割を果たすことになる。

◇利用された「ゾルゲ事件」

戦後まもなく「愛情は降る星のごとく」がベストセラーになって「愛国・反戦主義者」と言われていた尾崎秀実は、一転して「売国奴のスパイ」という見方が提供されることになる。また、当時のGHQ内で絶大な権力を誇示していた参謀第2部(G2)のウィロビー少将による報告書が49年2月に発表され、ゾルゲ事件が「国際スパイ事件」として世界的に認知されていくという流れもあった。GHQによる日本占領政策が当初の「非軍事化・民主化」から反共防波堤のための「再軍備」の方向に大きく舵を取られ、マッカーシズムが吹き荒れる中、ゾルゲ事件も利用された面があったのだ。

二木らは米軍に731部隊関係の書類を提供して訴追を免れる代わりに、彼らが創刊した雑誌「政界ジープ」や書籍で、米軍の意向に沿った宣伝や、反共活動、そして、「ゾルゲたたき」のメディアとして使われたのではないか、というのが加藤氏の見立てだった。ちなみに、政界ジープ社は56年に一流企業や政治家らの暴露記事をネタにした戦後最大の恐喝事件を起こし、雑誌は廃刊となった。

これらは現代史の闇に葬られたような話で、私も改めて、ゾルゲ事件の大きな影響力を感じてしまった。(了)